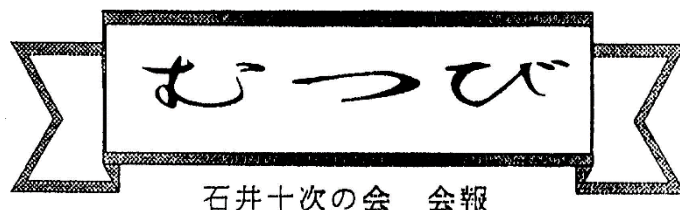


2025 年
(令和 7 年)
2 月 13 日



329 号

私の中の茶臼原風景

元福岡県立大学 田代英美

豊かな緑の台地、これが私の茶臼原第一印象でした。石井記念友愛社を訪ねる時、私はいつも JR 高鍋駅で電車を降りてタクシーに乗ります。友愛社に近づくにつれて窓の外には田や畑が広がり、田畑の向こうには樹木がずっと立ち並んでいます。畜舎や養鶏場、住宅も見えます。ここは自然そのままではなくて人が手を入れて生きてきた土地、豊かな緑は自然と人との共生を感じさせます。

友愛社について私が最も心を惹かれたのは、子どもの人格の確立と自立を最終目標とし、そのベースとなる自立的地域社会の構築に向けて地元の人々と協働ネットワークを形成してきたことでした。児嶋琥一郎初代理事長時代（1945 年～1991 年 1 月）の友愛社と茶臼原地域の人々との協働ネットワーク形成の過程を資料を基に整理し、2024 年 8 月の第 24 回石井十次セミナーでその概要を報告させていただきました。

資料を読むにつれて、私の茶臼原風景はどんどん変化していきました。何より違うのはさまざまな人々の登場です。とても一枚の画では描き切れません。木や竹の根や地下茎と格闘し水路の確保に懸命に働く人々、地域のお祭りで盛り上がる青年たち、地区集会所で料理をしたり話し合いをする女性たち、茶臼原小学校に登校する子どもたち、茶臼原小学校の学校行事奉仕作業や地区ごとの親子会に協力・参加する保護者たち、営農の

改善を検討する男性たち、ベトナムの人々とスポーツ交流を楽しむ地域の人たち・・・描いていくと限^{きり}がありません。私の中の茶臼原風景は、一枚の風景画ではなく、実に多くの多彩な色合いの情景が描かれた大画集となっていきました。

茶臼原風景に登場する人々の多様さが大きな特徴です。ご存じのとおり、明治期に石井十次が岡山孤児院の院児・職員とともに移住して茶臼原農村づくりを進め、第二次世界大戦後は日本国外を含む各地から多数の人々が入植しました。茶臼原への入植後に国内他地域やブラジルに移住した人もいます。また、昭和52年から平成6年にかけて友愛社と日本赤十字社宮崎県支部がベトナム難民援護事業を実施、総計500人以上のベトナム難民を受け入れ、地元住民との多方面での交流が見られました。茶臼原には、さまざまな他地域からの移住者を受け入れてきた歴史、そして、国外との交流の歴史も刻まれています。

私の中の茶臼原風景に登場する人々は、さまざまに異なる出身地や生活歴等を有しているだけではありません。各人・各家庭の自立した生活の基盤となる地域社会を自分たちの手で創ることを目指して相互の協働ネットワークを築いてきたことが、もうひとつの特徴です。友愛社も茶臼原の一構成員として、特に地域の情報センター・交流センターという役割を果たしたと言えるでしょう。私の茶臼原第一印象である“豊かな緑の台地”は、茶臼原の方々の多様性、自立性と協働性から創り出されたものだったのですね。

多様な住民が協働して自立的生活を可能とする地域社会を創る、これは今後も私たちの共通の課題です。茶臼原の歴史と文化をこれからも継承し発展させていっていただきたいと願っております。

「医学書を焼く」という行為の意味するもの

1. 十次が医者と孤児救済の両立を断念したことへの疑問

明治 15 年、石井十次は岡山医学校に入学し、その 5 年後「岡山孤児院」を設立します。父・万吉は、まず医者^{いしや}の資格をとり、それから孤児救済を始めるよう説得^{せつたく}します。十次は孤児養育を妻・品子に、教育を森友治に依頼し、自分は医学に専念することにしました。しかし明治 22 年、十次は「人は二人の主^{つか}に事^{あた}うる能^{あた}わず」と宣言して、6 年間学んだ医学書を焼いてしまいます。品子は驚愕し、友人は「十次君気が狂って医書を焼いた」という電報を万吉に打ちました。十次は医学校を退学し、孤児救済に専念するようになりました。以上がこれまで知られてきた「十次、孤児救済に専念」の物語です。実は、私はこの話に違和感をもち、納得できません



十次が 7 年間学んだ岡山医学

でした。十次の能力があれば両立は可能なはず、医者になれば孤児院経営にも大いに役立つ、幼い孤児たちは病気になりやすく、健康保険制度のなかった当時は寄附に頼る孤児院では医者にかかれ^かない、しかし医者^{いしや}の十次がいればその心配がない、西洋医学を学んだ医者は少なく開業すれば収入が孤児院経営にも役立つ、などの利点が容易に想像されます。十次はそれを承知していたはずである。この疑問は中々解消しませんでした。

2. 高鍋町シンポジウムにおける石井十次セミナーで疑問点の解明をはかる

令和 6 年秋の高鍋町歴史シンポジウムでは、石井十次がとりあげられ、4 回連続のセミナー「石井十次とその時代」が開催されることになり、講師を私が引き受けました。私は疑問に思っていた箇所を解明したうえで、セミナーで話すことにしました。文献資料を調べるうち、いろいろなことがわかってきました。

(1)岡山医学校の特殊性

岡山医学校は、数ある医学校のうちでも特別きびしい医学校でした。前身は岡山藩によって設立された岡山藩医学所で、明治 13 年に国立医学校となり岡山県医学校と改称されます。明治 16 年文部省令により「岡山県医学校の卒業生は、国家試験を受けることなく医師免許が授与される」こととなります。このような措置は東大医学部と岡山県医学校だけでした。この結果、岡山県医学校は西日本で最大の医学校となり、入学は比較的容易だが、卒業が極めてむづかしい学校となりました。1 学年 100 名のうち、卒業試験に合格して卒業する学生はわずかに 4、5 名にすぎませんでした。残りは留年して、翌年また受けなければなりません。十次も学業の厳しさに苦しみま

す。卒業試験では基礎科目、語学、それに臨床科目の内科、外科、小児科などのすべての科目に合格しないと卒業できません。その困難さは当事者でないとわかりません。十次は孤児救済と医学の勉強の両立を目指しますが、勉強は片手間にはできず両立は無理であることを感じます。両親、妻、友人は十次ならできるはずだと信じきっています。十次の苦悩は深くなります。

(2)当時、十次は強度のノイローゼに悩んでいた

医学校に入学した年の夏休みに高鍋に帰省したとき、郷里の若者のために馬場原教育会をつくります。そこから5人の若者を岡山に連れて来て学ばせながら、十次が生活費を稼ぎますが十分に稼げず、そのストレスから十次はノイローゼ状態になります。十次は自ら「^{のうびょう}脳病」と称しています。病状はさらに進み、^{そううつ}躁鬱症状を呈して行きます。ある時は落ち込んで鬱状態に、ある時は高揚して躁状態になります。こんな精神状態で孤児救済を開始し、医者と孤児救済の両立を目指しますが現実には困難です。十次の苦悩は理解できます。

(3)二者択一を迫られた十次は医学書を焼く

遂に十次は「医者の道は、勉強に専念しないと得られない。しかし孤児養育は天職であり、放置することはできない」ことを悟ります。十次日誌によれば「予は1年半の間、もし全く医業を棄てんか、父母及び恩人・^{すが}菅・^{ぶよう}武用氏らに申し訳なし。孤児院事業を棄てんか、天命を^{いか}如何にせん。予は^{しんちゅう}心衷この苦心のために幾度も^{たお}斃れたり」と書きました。明治22年1月10日、決断した十次は6年間学んだ医学書に石油をそそいで焼きます。翌月、医学校を退学します。石井十次日誌に「この時、妻は泣き、友人は悲しみ、世人は発狂せしと評せしも、予ははじめて心衷いうべからざるところの福を感じ。予が過去10年間において最も苦心せしは、実にこの難問を解決するまでの1年半なりき」と記録しています。

3. 「医学書を焼く」という行為には象徴的意味があった

医者の道は勉強に専念しないと得られず、孤児救済は天職であるため捨てられない。十次は後者を選びます。周囲にその説明をしても理解されないの、思い切って医学書を焼くことで医者を断念する決意を示します。説明を止め行為で示したのです。「医学書を焼く」行為は、十次にとって「医者の道を断念し孤児救済に専念する」ことを世の中に示す象徴的行為だったのです。そこに至るまで、十次は両立すべく最大限の努力をしたこと、その結果のやむを得ぬ選択だったことを私は理解し、疑問が氷解したのです。(編集委員 石川正樹)

編集委員長としての新年

編集委員長としての新年は次年度の年間計画を確定させることが脳裏から離れない。本日は、1月9日である。石井十次の会 会長の橋田和実氏が西都市長選挙に五期目を目指して立候補しており昨年11月から事務所で手伝っている。

忙殺の日々である。ゆえに、年賀状を書き上げるいとまもなく、ラインや携帯メッセージ等でつながる方には寒中見舞いに適した時期に返信することで許しを請うた。

さらには、1月の編集委員会開催も選挙結果が出た後の1月29日に一週間延期してもらおう羽目に。

その中でも原稿執筆者の確定作業だけは同時進行で進めている。特に、むつび巻頭の執筆者を。まずは、有識者や関係自治体の首長・教育長・校長職の方々・夏期セミナー講師などを考える。バランスよく配置することや内諾にはそれなりの時間を要する。それでも埋まらないときは苦渋の日々。

編集委員長としては毎年このような新年幕開けである。

という編集委員長の内部事情を賢察の上、原稿依頼の電話等が入れば快く承諾いただきたい。

* 追記 石井十次の会 会長の橋田和実氏の再選はならず

編集委員長 竹之下 悟



方舟館からの
お知らせ

明治末期、岡山から移築され、石井記念友愛社の敷地内に立つ方舟館。
現在は石井十次資料館の案内窓口、また、石井十次の会事務局として使われています。

★新会員のご紹介(敬称略) 【宮崎市】長峯 誠 石田 利一

★ご寄付をいただきました(敬称略) 【宮崎市】宮崎聖三一教会 【西都市】三井 京子

ここまでの掲載者は編集等の都合により1月29日までのものとしています。

★次回の通信発送作業は 3月12日(水)13日(木)いずれも9時からです。

お手伝いいただける方は 0983-32-4612 までお電話ください。

この会報は、宮崎県を中心に全国1700余の個人・団体に毎月送付しています。

〒884-0102 宮崎県児湯郡木城町大字椎木 644-1
社会福祉法人 石井記念友愛社後援会
石井十次の会
TEL/FAX 0983-32-4612
メール yuuaisya-jyuujinokai@kijo.jp

編集後記

巻頭の田代英美氏の「私の中の茶臼原風景」は感服した。夏期セミナーの時からテーマに刺激を受けていたので、入植当初の苦闘の姿を記した「開拓」誌を読み込んでいる(手元に6冊)。当時、義父も茶臼原小学校教頭として深く関わっていることをあらためて理解する。さらに、追求・整理に努めたい。

編集委員長 竹之下悟